

## はじめに

開院の1年位前から本格的に、放射線部門の準備に取りかかった。まず派遣技師の検討から始め、役職者で検討し責任者(堤内)と沖川技師を決め、後は国立からの移籍者が決まった時点で最終的にきめることとした。なお開院当初は、放射線技師の定員は4名で、国立からの移籍者(橋本)、熊本病院からのもう一人の派遣を上口と決め、基本的に派遣期間は1年間とした。

## 装置の検討

堤内、沖川を主に病院移譲後、そのまま使える装置と買い換えが必要な装置の検討をはじめた。国立三角病院の装置としては、CT、X線ー透視、一般撮影、ポータブル、外科用イメージであった。その中でそのまま使える装置は、1996年導入の外科用イメージ1装置のみで、後の装置は全て12年以上経過していて、今後三角、大矢野地区の中核病院としての役目を果たすには、最新装置へ買い換えが不可欠であった。みすみ病院開設委員会の承認を得て、放射線部の上申通り病院移譲後、順次交換導入していくこととなった。又三角、大矢野地区からの要望が強かったMRIはMRI棟が完成時に導入と決まった。

## CT検査

新規導入CTはアクイリオンマルチスライス(8列)で4月3日から稼働した。4月、5月とCTの検査件数が順調に増加し、このままの調子で行くと早い時期にCTの稼働率は100%になると思われたが、6月からは一進一退であった。1年間の検査総件数は3,791件、月平均で310件であった。内訳は頭部1,947件、体幹部領域1,814件、その他30件であった。

又単純、造影の内訳は単純3,249件86%、造影542件14%であった。みすみ病院の特徴として、心臓(冠動脈造影)CTが80件あった。尚、CTの稼働率としては、1年目ということもあり、50%程度であった。

## MRI検査

MRIは当初2003年11月導入予定であったが、3カ月間待って新しいタイプのMRI(エクセラート、バンテージ)を導入する事となった。エクセラート、バンテージの特徴は、以前のMRIと比べてガントリー全長が短くなったのと、検査時に発生する音が静かになったことである。以前のガントリーは200cmあったが、バンテージは150cmと短くなっており腹部、骨盤、腰椎等、身体中央部の検査では、顔がガントリーから出て、閉塞感が緩和され、閉所が苦手な患者でも検査が可能になった。

MRI装置は2月9日から稼働で、3月末までの50日間で290件であった。検査の内訳は、脳神経領域182件63%、整形外科領域64件22%、消化器領域21件7%、その他23件であった。又、単純と造影の内訳は、単純264件、造影26件であった。

## XーTV透視装置

X線ー透視装置は5月から稼働し、3月末までの11カ月で209件であった。内訳は消化管が126件、ERCP29件、他54件であった。

## 最後に

2月のMRI導入で放射線機器の整備も完成し、後はいかに機器を有効利用していくかである。2004年度の目標として特にMRI・CTの稼働率の向上が急務である。そのためにも脳ドック、肺ドックなど検診業務を行うのもいいのではと思っている。